

株式会社さくら都市総合研究所

清水 秀幸
首席研究員

11 近代表参道の歴史とその変遷

この章では、あらためて表参道とその周辺にスポットを当て、その全体像を知り、盛衰の変化について検証を進めたい。

そもそも、門前町を起源とする長野市の中心市街地は、表参道という都市軸を中心に歴史の蓄積を重ね、さまざまな便益を供しながら今日を迎えているのは先述の通りである。

しかし、モータリゼーションの発展とともに、郊外への人口流出と大型商業施設の進出により、外延性都市構造の形成が進行した。反面、中心市街地では、住民・商店主の高

齢化と家業継承者の不在という難題を抱えたため、商業機能を中心に陰りが見え始めた。

表参道の両脇に並ぶ古くからの商店や卸問屋も来街者の減少に呼応するように、シャッターを下ろさざる得ない状況が現に進行することで、空き店舗や空き家が増殖の一途をたどることになった。

しかし、その流れに一石を投じたのは、1998年の第18回冬季五輪・パラリンピック競技大会の長野での開催決定で、ホストシティの中心的役割を果たすであろう善光寺に至

る表参道の修景整備事業であった。

第一弾として長野市が行ったのは、表参道の両側の無数に並び、空中を横切る電柱・電線の地中化工事であり、両脇歩道を暗く覆い、腐食し色褪せたアーケードの撤去だった。

これを機に、地域住民の国内外からの来街者を温かく迎えるためのホスピタリティの醸成意識が急速に芽生え、修景整備のモチベーションが高揚することになったのである。そして、その機運をより高めたのが、大門

交差点の一面に、古くから業を営んでいた商店の閉鎖と、その売却問題の勃発である。

表参道と国道406号線の交わる東南角地の一面は、古くから軒を連ねる問屋街が形成され、紙業や金物問屋、下駄屋などによって造られた土蔵や店舗が多く集積し、近代長野市の歴史的遺産価値の極めて高い空間だ。

この一面に、利害と歴史を知らない第三者によって、その連続的景観を遮断するような異物でも建てられたら大変なことになる、という危機意識をもった地域住民有志が自ら組織する有限会社長野大門会館をもつてその一面を取得し、整備したのが今日の「ばていお大門蔵楽庭」である。

この出来事は、2001年6月のことである。当時、その940坪余りの敷地には、使途を離れた土蔵や町屋、そして三階建の楼阁などの歴史的ストックが中庭を取り囲むように配置され、時が止まったように静寂中にたたずんでいた。

そして、これらのストックを再生し、表参道のまち並みに沿った屋根のスカイラインを維持し、その連続性を保ちながら、隣接地を取り込んだ、回遊性豊かな空間造形の具体化と、「小さな旅気分を味わえるまち」を基本



2005年に竣工したばていお大門蔵楽庭(くらにわ)

理念(コンセプト)に事業計画が具体化し、TMO(Town Management Organization、タウンマネージメント機関※)構想の設置とリノベーション補助金を活用した改修工事が着手された。

そして05年11月、建物棟数14棟、総延790坪、テナント総数20店舗、総事業費5.4億円を投じたばていお大門は、グランドオープンを迎えた。(続く)

※タウンマネージメントは、中心市街地における商業集積を一体としてとらえ、業種構成、店舗配置等のテナント配置、基盤整備及びソフト事業を総合的に推進し、中心市街地における商業集積の一体的かつ計画的な整備を運営・管理すること。

すなわち、様々な主体が参加するまちの創造と運営を横断的・総合的に調整し、プロデュースすること(中小企業庁HPより)。

清水 秀幸氏(しみず・ひでゆき) 1952年長野市生まれ、76年明治大学政経学部政治学科卒。2013年6月株式会社守谷商会役員を退任し、同年7月株式会社さくら都市総合研究所を設立。長野市都市計画審議会専門委員ほか3委員、その他各地方自治体の審議員・部会員を兼任。現在同研究所社長